

【調査・研究報告】

再現！道頓堀の芝居小屋 — 展覧会の開催とその報告 —

黒田 一充・長谷 洋一・藪田 貫・
橋寺 知子・櫻木 潤・谷 直樹・
児玉 竜一

はじめに

本稿は、平成 25～26 年度関西大学教育研究緊急支援経費、研究課題「道頓堀の芝居小屋の再現」の報告である。

関西大学大阪都市遺産研究センターでは、芝居町道頓堀の景観復元を目指し、平成 23 年（2011）12 月 21 日にホームページ上にコンピューターグラフィックス（CG）「道頓堀五座の風景」を公開した。さっそく、『朝日新聞』『産経新聞』『毎日新聞』の各紙の記事に取り上げられ、多数のアクセスがあるなど、大きな反響を得た。この CG は、昭和前期の道頓堀筋の様子を想定し、西端の御堂筋から東端の堺筋まで東向きと西向きの方向へ進みながら、道の両側にある劇場や店の正面を紹介するものである。

この CG 公開をきっかけとして、平成 25 年 1 月に道頓堀商店会と関西大学の連携協力に関する協定書が締結され、さらに 7 月には道頓堀に角座が復活し、道頓堀開削 400 年（平成 27 年）を前にして、道頓堀再生への動きが活発となっている。

しかしながら、この公開された CG には、まだまだ改善すべき点が残っていた。それは当時の劇場については、正面の様子はわかるが、劇場内部に入ることではできなかった点である。それというのも劇場内部の様子を描いた資料が少なく、江戸時代においては、歌川豊春の描いた「浮絵歌舞伎芝居之図」や初代鳥居清忠の描いた「寛保三年の江戸中村座内部の図」など数えるほどの作品しかなく、大坂の劇場についてはよくわからないのが実情であったからである。

ところが、公開の翌年、明治時代に活動した大阪の劇場大工・中村儀右衛門の資料が大阪都市遺産研究センターに收藏されることになり、その資料の中の図面類には、大阪の劇場の設計図が多数含まれていることがわかり、当時の劇場の様子が少しずつ明らかになってきた。

また、これよりさき、大阪都市遺産研究センターでは、山田伸吉が描き、小説家の長谷川幸延が画賛を入れた「道頓堀今昔」という大きな絵を所蔵していた。この絵は、かつて芝居町として賑わった道頓堀の様子を道頓堀川の北側から描いたもので、朝日座・角座・中座の屋根や櫓、芝居茶屋が描かれている。この絵の作者、山田伸吉は大正から昭和に松竹に勤め、舞台背景やプログラムなどの美術デザインをおこなった人物である。この山田伸吉の資料も研究セン

ターが収集するようになり、中村儀右衛門資料とあわせて明治から昭和の道頓堀を中心とする芝居の世界が少しずつ明らかになってきた。

これらの資料の分析については、これまでも大阪都市遺産研究センターと道頓堀商店会が主催した道頓堀フォーラムや山田伸吉作品の展示会で紹介してきた。しかし、さらに多くの市民の方に知っていただくために、平成26年（2014）4月から5月の期間で、大阪市立住まいのミュージアム 大阪くらしの今昔館と大阪都市遺産研究センターが共催し、芝居小屋と役者絵・大道具帳を中心とした展示をおこなう「再現！道頓堀の芝居小屋―道頓堀開削399年―」展を計画した。

大阪くらしの今昔館は、天神橋筋六丁目にある博物館で、江戸時代大坂の町を実物復元するなど、建築的手法をいかした展示で大阪の都市景観の魅力を発信して大きな実績をあげている。一方の大阪都市遺産研究センターは、道頓堀CG制作や中村儀右衛門資料にもとづく芝居小屋の復元的研究で成果をあげており、この両機関の共同研究と展示によって、芝居町道頓堀の景観復元をさらに前進させることになるため、この教育研究緊急支援経費を活用させていただいた。

1 中村儀右衛門資料

展覧会の内容について触れる前に、中村儀右衛門資料と山田伸吉関連資料について紹介しておきたい。

中村儀右衛門は、嘉永5年（1852）12月8日、大阪市西区北堀江上通二丁目（現大阪市西区北堀江）に生まれた。12歳から父のもとで大工の修業を始めるとともに、製図法などを学び、明治5年（1872）に父の死去とともに跡目を相続し、五代目中村儀右衛門を名乗るようになった。20代のころには、京都や大阪の小学校のほか、九州の病院や個人の邸宅などの建築を手がけ、明治18年には、東京の明治宮殿（皇居内）の造営にも携わっている。この間、明治16年（1883）には、木造建築の加工技術である「規矩術」のテキストとして『明治中学規矩要訣』を執筆している。

明治23年（1890）の東京・柳盛座に続き、明治26年（1893）に横井勘一の委嘱による千日前・横井座の設計・建築をおこなって以降、劇場建築を手がけるようになり、弁天座・浪花座・角座など、道頓堀の劇場のほかにも、大阪市内の劇場の新築や修築を請け負うなど、大阪を拠点に活躍した。大正10年（1921）1月21日に死去し、下寺町に埋葬された。

大阪都市遺産研究センターが所蔵する「中村儀右衛門資料」は、彼が大工棟梁として携わった道頓堀ほか大阪の劇場の建築図面や仕様書などの書類、舞台の背景画の下絵をまとめた大道具帳のほか、日記・覚書などを含んだ総数455点に及ぶものである。

そのうち、建築関係資料は293点を数え、関西、とくに大阪の劇場や観物場、寄席、映画館が多くを占めている。建築図面は、一般に設計者、施工者、注文主、管理者などの手元に残る

可能性がある。中村儀右衛門資料は、設計と施工をおこなった大工が保管していた資料であり、実際に建てられて完成した建物の図面だけではなく、最初の段階のプランのようなスケッチや計画途中の検討段階の図面などが多く、その中には候補段階で取り下げられた設計案の図面なども含まれている。さらにこれらの図面だけでなく、工事の細かな仕様を文書で記述した仕様書や摘要書、役所への届出書類の写し、見積書、材木の一覧表、契約書など、様々なものが含まれている。劇場の建築図面や仕様書は、劇場の正面や側面などの外観、内部・外部の構造、工事に必要な材料や工事方法などが記されている。資料に残っている劇場は、「道頓堀五座」のうち浪花座・角座・中座・弁天座があり、ほかにも千日前、梅田、天満などの劇場も含まれ、彼が「劇場大工」として大阪の数多くの劇場建築を手がけていたことがわかる。また、明治30～40年代の大道具帳は、芝居の舞台の背景画や大道具を、演目や場面ごとに描いた帳面で、表紙には興行した年月、上演演目が記されている。これらの資料からは明治・大正の大阪における劇場建設の様子とともに、当時の芝居小屋の息づかいが伝わる貴重な資料である。

2 山田伸吉関係資料

山田伸吉（本名・真吉）は、明治34年（1901）に大阪府西成郡稗島（現・大阪市西淀川区姫島）に生まれた。大正11年（1922）に松竹合名会社に入社した。最初の仕事は、小山内薫演出、市川左団次主演で京都・知恩院山門を背景に演じられたページェント『織田信長』のポスターと、映画『底なし湖』のポスター制作であった。

松竹は、同年4月に楽劇部を創設し、翌年5月に大阪松竹座を道頓堀に開場する。楽劇部は大阪松竹座専属となり、柿落とし公演は『アルルの女』であった。また大正13年には焼失した明治座を京都松竹座と改称、同7月には松竹キネマの下加茂撮影所が誕生する。この時期は関西での松竹の興行が著しい時期でもあった。

山田は、松竹座ポスターのデザインのほか、舞台背景デザインや興行館のプログラムである『SHOCHIKUZANEWS』の表紙など、上演前の舞台に関する様々な美術デザインを手がけた。その後は、書籍の装丁や表紙絵や挿絵も手がけるようになった。昭和12年（1937）ごろからは洋画家を目指して春陽会や新文展、独立美術協会展、二科会などに出品し、昭和38年（1963）には最初の個展も開いており、昭和56年（1981）3月9日に死去した。

研究センターが所蔵する山田伸吉関係資料には、彼が関わった公演の、舞台の背景画や芝居の様子を描いた油彩の芝居画があり、展覧会準備中、油彩芝居画「車引」（写真1）を新たに購入した。



写真1 山田伸吉「車引」

3 展覧会の準備

関西大学教育研究緊急支援経費の研究期間は平成25年度と26年度の2年間だが、初年度は展覧会の準備作業に費やされた。

展示品のひとつである中村儀右衛門資料の大道具帳と山田伸吉資料については、すでに整理とデジタル化がおこなわれていたが、児玉竜一氏の指導の下で分析をおこなった。その結果、背景画や大道具の配置などから江戸と上方の芝居における演出の違いなどが明らかになり、その成果の一部が展覧会期間中のフォーラムで披露された。さらに展示に向けて、関西大学図書館所蔵の北条秀司資料について写真撮影をおこなった。

また、展示の目玉のひとつとして中村儀右衛門資料をもとに、明治時代に設計された浪花座の模型を製作した。

江戸時代以降、各地で芝居小屋が建てられたが、江戸時代の建築としては香川県琴平町の旧金毘羅大芝居（現在・金丸座、天保7年[1836]）が唯一残るものである。明治時代の芝居小屋も、岐阜県には各務原市の村国座（明治10年）、下呂町の鳳凰座（同16年観覧席増築）、白川町の東座（同22年）、下呂町の白雲座（同23年）、中津川市の常盤座（同24年）、加子母村の明治座（同27年）、中津川市の蛭子座（同34年）が残っている。そのほかには、秋田県小坂町に康楽館（明治43年）、福島県梁川町の旧広瀬座（明治20年ごろ、福島市民家園に移築）、大阪府池田市の呉服座（明治25年・愛知県明治村に移築）、兵庫県豊岡市の永楽館（明治34年）、熊本県山鹿市の八千代座（明治43年）が残るなど、全国的にも数は少ない。なかでも秋田県の康楽館は正面外観が洋風の外観であり、付近の小坂鉦山が大阪の藤田組が採掘をおこない、そこで働く人びとの娯楽施設として建築されたものである。柿落としも大阪の歌舞伎の一座が招かれている。

浪花座は、江戸時代以来何度も焼失したが、その都度再建され、中村儀右衛門が設計して明治43年（1910）に建てられたものが、昭和20年（1945）の戦災による焼失まで存在していた。中村儀右衛門資料には、このときの設計図が残っているが、その正面の外観は写真に残る戦前の浪花座とは異なり、正面中央にドームをもつ洋風のものであった。洋風意匠の劇場は、東京の歌舞伎座や道頓堀の角座の改築、大阪梅田の大阪歌舞伎で試みられたが、今回の展示では、この幻となった洋風意匠の浪花座を復元する模型を製作することになった。模型製作について

は、康楽館や隣に移築復元されている小坂鉦山事務所の模型を作った青森市の藤野勇氏に依頼し、100分の1の模型を製作した。この模型の後ろ側の舞台部分は屋根がなく、楽屋、舞台、客席を図面から再現していただいた(写真2・3)。あわせて、橋寺知子氏の指導の下で学部生の実習として別の模型も製作し、両方を展示した。

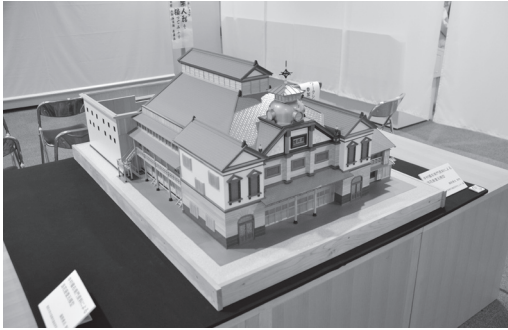


写真2 浪花座復元模型(縮尺30分の1)

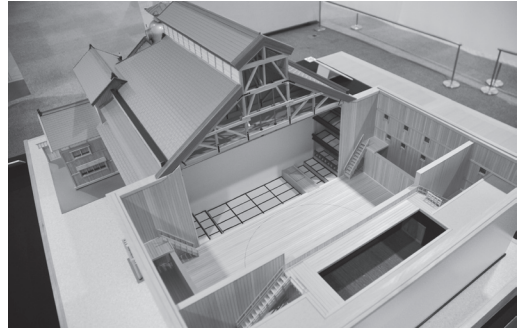


写真3 浪花座復元模型(内部)

平成26年度の研究費は、展覧会の開催経費(展示造作の製作、展示品の運搬など)、展示図録の作成、記念講演会の開催等に費やした。

4 展覧会の実施

展覧会は、「再現!道頓堀の芝居小屋-道頓堀開削399年-」と題して、大阪くらしの今昔館と、関西大学大阪都市遺産研究センターの主催で、平成26年4月19日から5月25日の期間に、大阪くらしの今昔館の企画展示室で開催された。

展示構成は、あいさつ文などの導入部の後、「芝居町道頓堀のあゆみ」のコーナーとして、江戸時代の名所図会などにみる道頓堀の賑わいや明治時代の「道頓堀五座」の時代に関連する展示品を並べた。続く「描かれた歌舞伎のスターたち」のコーナーでは、江戸時代上方役者絵や近現代の日本画の中に描かれた役者の作品を並べた。明治後期の道頓堀の店を記した「大阪営業案内」の後は、「大道具帳の魅力」のコーナーで、舞台の背景画を載せた大道具帳や現在のプログラムに当たる「芝居番付」や「絵本番付」を紹介した。

そして、「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」のコーナーで、中村儀右衛門の紹介や角座や浪花座などの劇場の設計図面を展示した。「山田伸吉」のコーナーでは、山田が描いた舞台の背景画、松竹座の公演ポスター、装丁を担当した書籍類、油彩の芝居絵などを並べた。

関西大学図書館には、関西大学で学位を取った演劇の脚本家・北條秀司の自筆原稿などが残っており、「北條秀司」のコーナーで自筆原稿や台本を展示した。最後に「古写真にみる道頓堀」のコーナーで、大阪城天守閣所蔵の南木芳太郎写真資料(南木コレクション)から昭和前期の道頓堀の劇場や客席、道頓堀の風景写真などを展示した。

展示は、会場ホールの高い天井をいかして、中央に浪花座に見立てた部屋を設け、入り口の

壁面に幻の浪花座外観正面を一部復元し、その中に浪花座模型を展示した。奥の壁面には舞台を仮設してスクリーンを据え、大道具帳に描かれた舞台の背景画を投影することで、劇場の雰囲気を出すことを試みた。展示室の周囲の壁面に展示コーナーを左回りに配した。

展示作業とともに、長谷洋一氏・櫻木潤氏を中心に展示図録が作成され、展示品のうち93点の写真を載せたA4横版で64ページ、オールカラーの図録を作成した。



写真4 展覧会会場の入口



写真5 展示室

5 期間中の催物と総括

展覧会の期間中には、次のような催しをおこなった。

◎ワークショップ 文楽人形を操ってみよう！

平成26年4月19日（土） 企画展示室内 1回目：13:00～ / 2回目：14:30～
能勢人形浄瑠璃鹿角座による人形遣い体験教室 各回20名先着順

◎講演会「芝居町道頓堀いま・むかし」

平成26年4月27日（日）13:30～15:30 大阪市立住まい情報センター3階ホール

【講師】 成瀬國晴氏（宝塚大学講師・イラストレーター）

児玉竜一氏（早稲田大学文学部教授・早稲田大学演劇博物館副館長）

高橋隆博氏（関西大学文学部教授・大阪都市遺産研究センター研究員）

◎ミュージアムトーク「芝居町道頓堀と康楽館」

平成26年5月8日（木）13:30～15:30 大阪市立住まい情報センター3階ホール

【講師】 肥田皓三氏（元関西大学教授・大阪芸能懇話会主宰）

高橋竹見氏（秋田県小坂町康楽館館長）

参加者は、それぞれ4月19日40名、4月27日196名、5月8日155名で、とくに講演会とミュージアムトークは熱心な聴講者で館内は満員であった(写真6)。

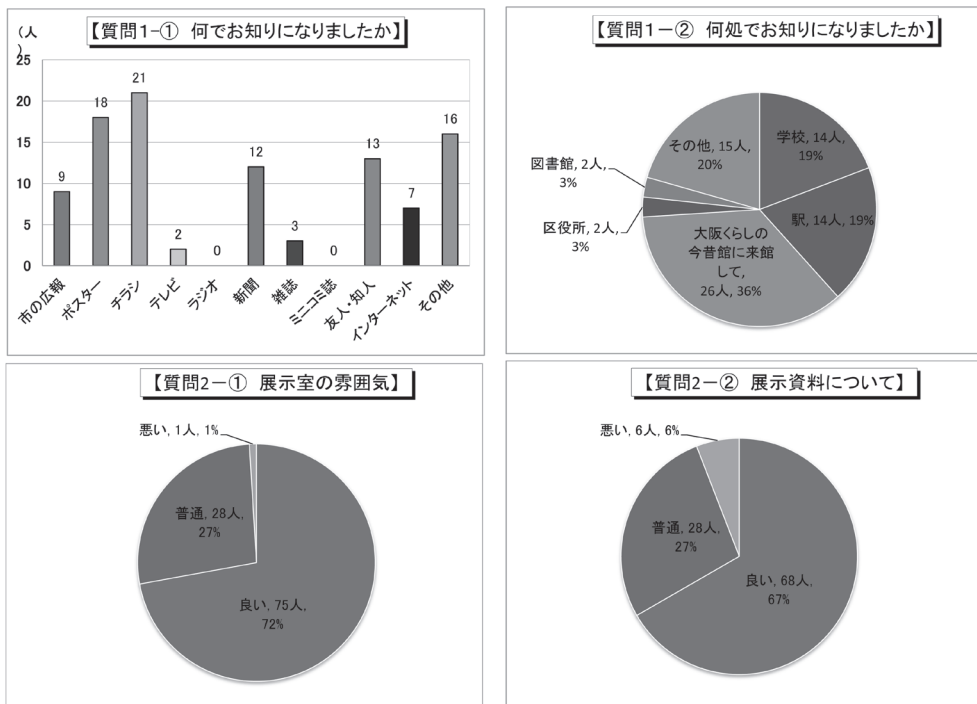


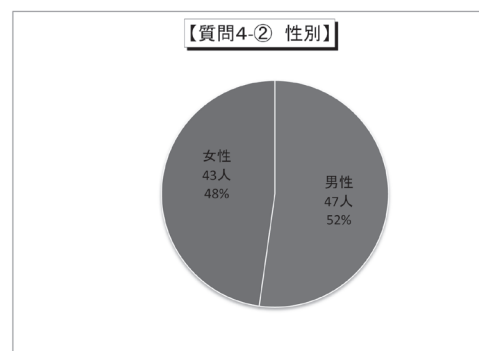
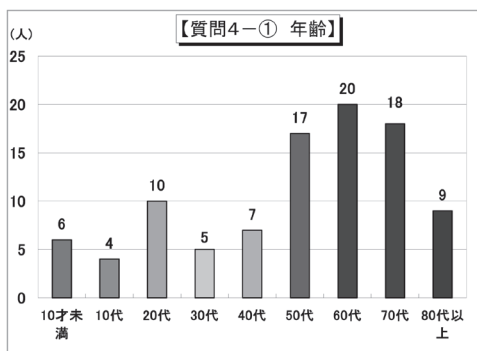
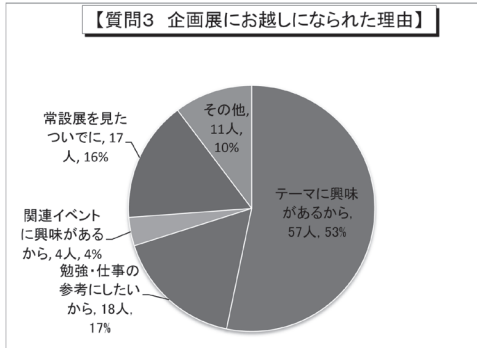
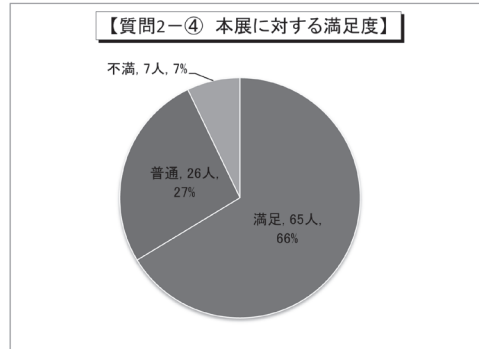
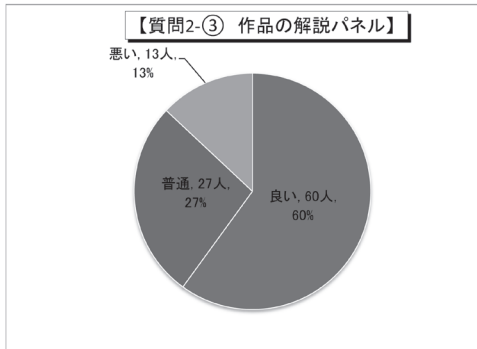
写真6 講演会

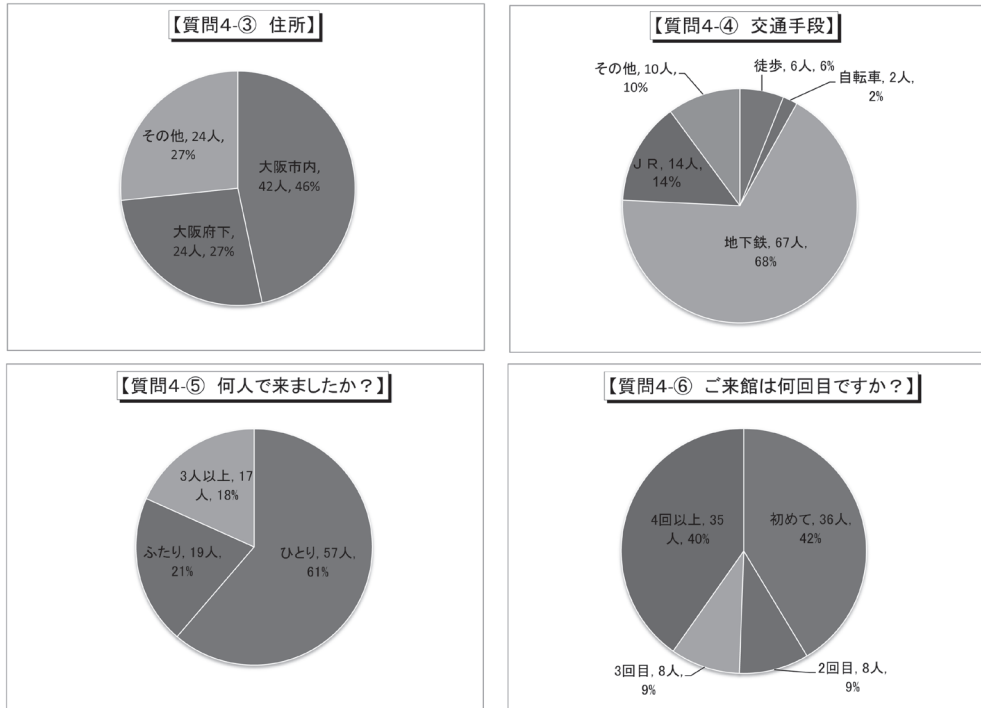
展覧会の平成26年4月19日から5月25日の期間(32日間)の入場者数は、7,434名であった。

入場者の中でアンケートを記入していただいたものを円グラフにして、以下にまとめておいた。

「再現!道頓堀の芝居小屋 ~道頓堀開削399年~」
平成26年4月19日(土)~5月25日(日)(開催日数:32日間)
アンケート回答総数 105 件







参考文献

- ・長谷洋一・櫻木潤編『道頓堀今昔一芝居画家山田伸吉の世界』（関西大学大阪都市遺産研究センター、2012年）。
- ・藪田貫・藤岡真衣「大阪都市遺産と道頓堀—大阪の劇場大工中村儀右衛門資料の紹介をかねて—」（『大阪都市遺産研究』第3号、関西大学大阪都市遺産研究センター、2013年）。

[追記]

本稿は、平成25～26年度関西大学教育研究緊急支援経費の研究課題「道頓堀の芝居小屋の再現」の研究報告の一部である。研究員と担当は下記の通りである。

研究員

- 文学部・教授 黒田 一充 総括・道具帳の整理と分析
- 文学部・教授 長谷 洋一 山田伸吉資料の調査 道具帳の整理・分析
- 文学部・教授 藪田 貫 大阪くらしの今昔館・道頓堀商店会との連携

再現！道頓堀の芝居小屋 ―展覧会の開催とその報告―（黒田）

環境都市工学部・准教授 橋寺 知子 劇場大工中村儀右衛門資料整理と復元的研究
大阪都市遺産研究センター特任研究員 櫻木 潤 山田伸吉資料の調査 道具帳の整理・分析
大阪くらしの今昔館・館長 谷 直樹 展示総括
早稲田大学文学部・教授 児玉 竜一 大道具帳の整理・分析

協力者

常行 貞臣・速水 裕子・藤岡 真衣・中尾 和昇・吉野なつこ・相良真理子・藤野 勇